

エジプト・ナイル流域の土地に刻まれた歴史の連続と断絶

熊倉和歌子 くまくらわかこ / AA研

歴史資料を基礎として研究を積み重ねていく歴史学においても、フィールドワークは情報収集の手段の一つである。特に、当時のものが何らかの形で残されている場合、フィールドはまたとない歴史資料を提供してくれる。

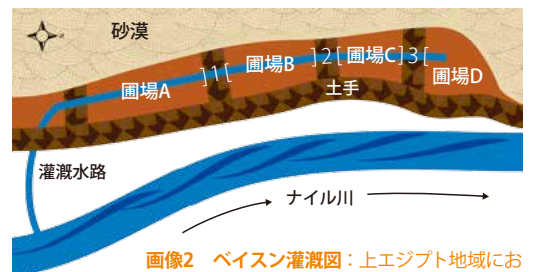
過去との断絶

皆さんは、「エジプト」というと何をイメージされるだろうか。おそらく、多くの人は、ピラミッドやその傍らを闊歩するラクダ、その背後に広がる広大無辺な砂漠を思い浮かべるのではないだろうか。確かに、エジプトは降水量がほぼゼロであり、国土の90パーセント以上を砂漠が占めている。しかし、1億人に近い人口のほとんどは、国土の10パーセントに満たないナイル流域に分布し、人々はいつの時代もナイルに親しんできた。彼らにとっての母なる大地は、砂漠ではなく、ナイルによって潤される緑豊かな土地である。

私は、エジプト社会の根底にあるナイルの水利用、そのために改変される土地、そして、灌漑や農地を維持するための制度、これらが歴史的にどのように変化してきたかということに関心を持ち、歴史学の見地から研究を進めている。大ピラミッドが4000年の歴史を背負って威風堂々と聳えているのを見ると、エジプトの歴史はなんと悠大なのだらうと感心するが、一方で、今は見ることができないナイルの増水期の様子を写した古写真からは、歴史の断絶を強烈に感じる(画像1)。このような連続と断絶の共存とそのダイナミズムこそが、エジプト史の大きな魅力になっているわけであるが、私の研究関心においても、19世紀以前と以後で大きな断絶がある。それは、通年灌漑への移行である。



画像1 ナイルの洪水とピラミッド：ナイル上流から運ばれてくるシルト（沃土）を含んだ赤茶色の水が、ピラミッド手前の集落まで迫っている様子が写されている。2頭のラクダは水の中を進んでいるようである。1890-1910年頃。（アメリカ議会図書館のウェブサイトより [https://www.loc.gov/resource/ppmsca.41356/] 最終アクセス日2019年5月7日）

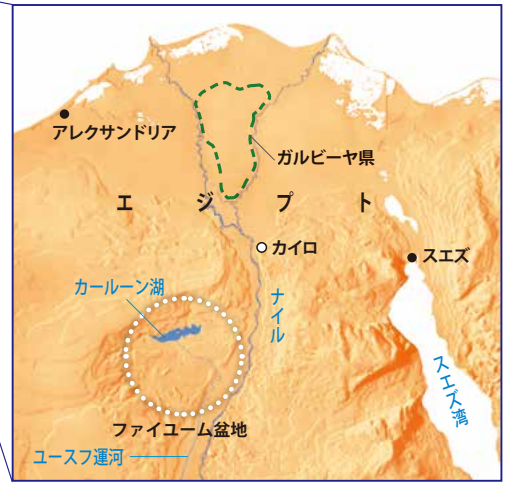


画像2 ベイソン灌漑図：上エジプト地域におけるベイソン灌漑の仕組みを端的に表したものの。水路によって圃場（ほじょう）AからDに水が送られると、開放していた土手の一部である1〜3を閉じて、湛水する。

ナイルは、今も昔も変わらず、夏季に増水し、冬季に減水する。このサイクルに気づいていた古代王朝の人々は、耕地の周りに土手をめぐらせ、増水したナイルの水を流し込んで耕地を灌漑した(画像2)。45日間ほど耕地を湛水すると、自然と水が引いていき、その後冬作の種まきをするというのが、エジプトの伝統的な農業であった。季節ごとの水量変化を活かしたこの季節灌漑の方法は、湛水の様子を水をはった^{たらい}のようであることから、研究においては「^{たらい}ベイソン灌漑」と呼ばれている。近代に至るまでベイソン灌漑はゆっく

りと発展してきたが、19世紀に突如として大きな変化を迎える。ときのオスマン帝国エジプト州総督ムハンマド・アリー（在任1805-49）は、西洋列強に対抗すべく近代化政策を打ち出し、その一環として季節灌漑から通年灌漑に移行することを目指したのであった。この背景には、当時商品作物として莫大な収入が見込まれた綿花の生産量を増加させるねらいがあった。綿花はまだナイルの水位が低い季節に生育するため、伝統的な灌漑方法では十分な灌漑ができなかったのである。そこで、大規模な堰や水路が各地に設置されて流量が制御

エジプト



され、デルタ地域が順次通年灌漑に切り替えられていった。その後、アスワンダム
の建設(1902)、アスワン・ハイダムの竣工
(1970)を経て、完全移行を果たした。こ
れをもって、ベイスン灌漑は過去のもの
となったのである。

中世の土手を復元する

私がベイスン灌漑の研究に取り組み始
めたのは2011年頃のことだったが、当時、
ベイスン灌漑の様子がイメージできるほど
の情報量を持つ研究文献はなかった。わか
っていたのは、耕地を取り囲む土手が大
変重要な意味を持つ構造物で、それは政府
管理の大規模な土手と村管理の小規模な

土手に大分されるということだけであつた。
歴史資料に基づく研究を旨とする文献史
学においては、史料がないと研究が成立し
ないので、このような状況ではお手上げで
ある。しかし、現在でも、歴史的な遺物が

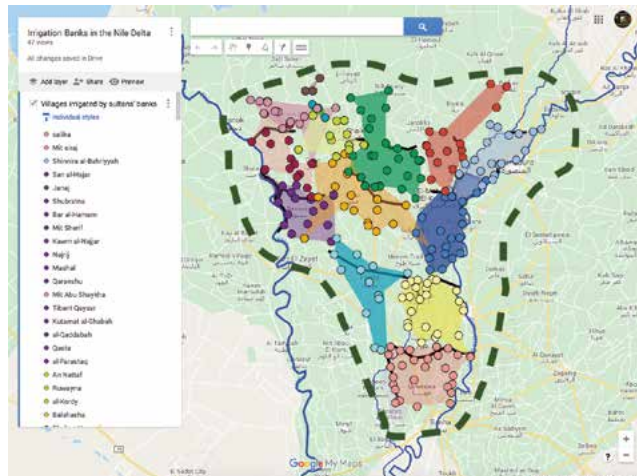
日常生活の中に溶け込んでいるエジプトの
こと、もしかしたら、土手の痕跡がどこか
に残っているかもしれないと考えた。とに
かく何かしらの糸口をつかみかけた私は、
史料の発掘を後回しにして、土手探しの旅
にでたのであつた。それは、研究人生初
のフィールドワークであつた。そして、カ
イロ以南の地域をめぐったところ、あるこ
とに気づいた。それは、今、車で走ってい
るこの道こそが、かつての土手なのではな
いかということである。エジプトの農村部
の道路は、周辺の耕地に対して高くなって
おり、その差は1メートル以上ある。また、
カイロの南西100キロメートルほどの位置
にあるファイユーム盆地の入り口では、レン
ガ造りの堰の遺構も残っていたが、これ
もまた農道として利用されていた(画像3)。

人々に忘れられた歴史が土地に刻まれて
いる、という実感を得た私は、ますます土
手に取り憑かれた。何とか土手に関する史
料を得ようと、エジプト国立文書館で文書
を渉猟した。ある日、『土手台帳』と題さ
れた台帳を手にした途端、状況は一変した。
そこには、台帳が編まれた16世紀前半に
おいて土手が設置されていた場所や、そ
の土手の維持管理を担う村名などが記載
されていたのである。これには大いに興奮
し、文書館で朝から晩まで一心不乱にその
台帳の記録をノートに写し取った(エジ
プト国立文書館では、コピーに様々な制約が
あり、ノートに手書きで写し取るのが最も
ストレスのない複写方法である)。帰国後、
その記録をもとに政府管理の土手の設置
位置などを地図上にマッピングしてみたこ
ろ、美しい図ができあがった(画像4)。

その後、再びエジプトに戻り、この図を
握りしめて、デルタ地域で土手の痕跡を
探し回った。ところが、それらしい遺構も、
地形もまったく見つからなかったのである。



画像3 ファイユーム盆地の入り口に残るレンガ造りの堰：現在では農道として使われている。このように、エジプトでは、歴史的な遺構が日常生活の中に溶け込んでいる。(筆者撮影)



画像4 デルタ地域のガルビーヤ県のベイスン灌漑図：緑色の点線内が対象地のガルビーヤ県。黒線は政府管理の土手を、各色で表される面は土手に基づく水利圏を示す。政府管理の土手は、ナイルと垂直に設置され、堰の役割を果たしていたことがわかる。

これには肩すかしを食らった。しかし、これは、デルタ地域が、19世紀における通年灌漑への移行をいち早く経験した地域であり、その後、鉄道が敷設されるなどして、大きく土地が改変されたことの証左であろう。私の土手探しの旅は、またも近代化による断絶に阻まれてしまったのである。他方、カイロ以南の上エジプト地域は20世紀に入ってからベイスン灌漑が保たれた地域が多く残され、デルタでは見つけることができなかった土手の痕跡を見つけることができたのであった。かくして、歴史のダイナミズムも断絶も、すべてが刻まれたエジプトの土地に、私はすっかり魅了されてしまった。

空間を歴史的に分析する

現在、私が注目しているのは、先にも述べたファイユーム盆地である。香川県ほどの面積を持つこの盆地は、ナイルから20キロほど離れたところに位置するが、ナイル上流から分枝するユースフ運河（ユースフはヨセフのアラビア語での発音。伝説で、ヤコブの子であるヨセフが掘ったとされることからこのように呼ばれている）によってナイルの水が盆地に流れ込み、村々を潤して、最後はカールーン湖に行き着く。その運河の名が示しているように、この盆地の歴史も古い。盆地とその背後の砂漠の境界には、盆地を取り囲むようにして古代王朝期からギリシア・ローマ期の遺跡が分布している。

この盆地は、ユースフ運河から分枝する大小の水路によって灌漑されてきた。盆地の入り口には堅牢な堰や水門が設置され、一定量の水が盆地内部に流入し、留まるようになっていた（画像5）。こうした水利設備は、この盆地の開拓が進んだ前3世紀以降、整備されていったと見られる。つまり、ファイユーム盆地は、近代よりももっと以前に通年灌漑に移行していた地域であり、それゆえに、近代化の波を大きく受けなかったと考えられるのである。

私は、この盆地を「実験箱」に見立てて、この小さな空間で起こる変化が一体何に起因するものなのかについて考察することにした。例を一つあげよう。この盆地では、13世紀にサトウキビ栽培（夏作）が盛んに行われていたが、16世紀にはサトウ

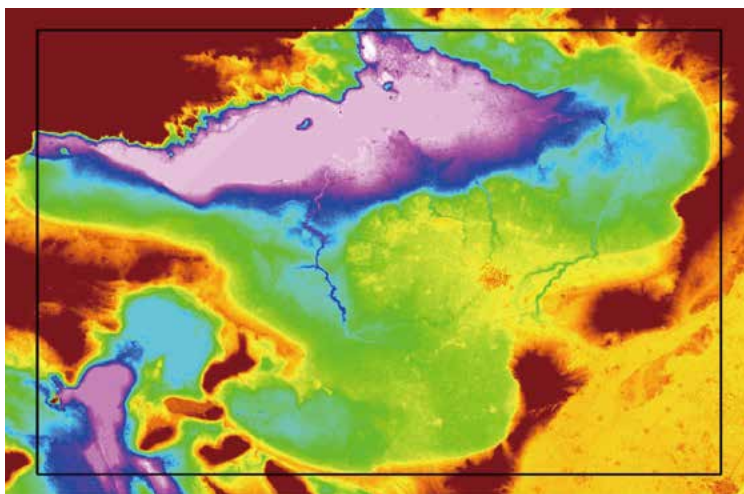
キビ栽培は北東部の一部地域のみに見られるだけになり、他の地域では、小麦や大麦（冬作）などの穀物の栽培が主流となった。このような変化はなぜ起きたのだろうか。その背景には、16世紀に顕著となった寒冷化の影響、ヨーロッパ諸国によるサトウキビ栽培の拡大といったグローバルな要因や、地質の低下や水資源の減少といったローカルな要因など、様々な要因が考えられる。

しかし、最近、考察を進める中で、この実験箱の中で起こる変化は、グローバルな要因とは無縁ではないかもしれない

が、ローカルな要因の方がより直接的かつ決定的であろうと考えはじめています。そこで、この空間をよりミクロな視点で見えてみることにしたのである。現在、そのとっかかりとして、20世紀前半の地図と現在の衛星データから、この空間の地形を立体的に把握して、空間内部の地形的特徴を探る作業と、歴史記録のデータベース化を進めている（画像6）。同時に、それらの情報をもって、現地をめぐり、「現場感覚」を鍛えている。その土地を実際に歩いてみることで、そこに刻まれた歴史に気づくことがあるかもしれないと期待しながら。



画像5 ファイユーム盆地の入り口に設置された水門：現存する水門は13世紀の мамルーク朝スルターン・バイバルスによって建造されたものと言われている。（筆者撮影）



画像6 ファイユーム盆地の標高図：共同研究者の佐藤将氏が作成した標高値によって色分けをした図。空間を立体的に分析するのに役立つ。